

まんが
漫画でわかる！

にほんいさん
私たちの町の日本遺産

あ い 藍のふるさと あ わ 阿波

そ しこう たず
～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～



目次

「藍」^{あい}と私たちの町

2

「藍」^{あい}って何？

3

漫画^{まんが} 阿波^{あわ}と藍^{あい}の物語

4

日本遺産^{にほんいさん}「藍^{あい}のふるさと 阿波^{あわ}」ストーリー

18

「藍^{あい}のふるさと 阿波^{あわ}」マップ

20



とうざようじんぶつ
登場人物

アイちゃん

徳島県で暮らしている
12歳の女の子

2019年、私たちの町のストーリーが

にほんいさん にんてい
日本遺産に認定されました。



なんだか誇らしいこと
ですね！
ところで日本遺産って
何でしょう？

日本遺産とは、日本の魅力を再発見するための取り組みです。地域の魅力を分かりやすいストーリー（物語）にまとめて、国内外に発信し、観光や地域の盛り上げにつなげるために認定されます。現在、全国に104件のストーリーがあります。

今回、日本遺産に認定された私たちの町のストーリーは、徳島県内の吉野川流域9市町（徳島市・吉野川市・阿波市・美馬市・石井町・北島町・藍住町・板野町・上板町）で構成されています。各地で大切に受け継がれてきた32の文化財が、阿波藍のストーリーを作り出しているのです。



私たちの町と深いつながりがある「藍」のことを、もっと調べてみましょう！



古くから日本人の生活に深くかわり、神秘的なブルーといわれた「藍」。徳島県の北部を雄大に流れる吉野川の流域は、藍染料＝薬の日本一の産地です。この地域の平野部に見られる高い石垣と白壁の建物に囲まれた豪農屋敷や脇町の豪華な「うだつ」が上がる町並み、「阿波踊り」のリズムから、藍商人が薬の流通を担い、全国を飛びまわって活躍し、華やかに栄えたかつての様子をうかがい知ることができます。この地域では、今も薬が伝統的な技法で生み出されており、その薬が生み出す藍の色彩は人々を魅了し続けています。

私たちの町の日本遺産ストーリー

藍のふるさと

阿波

～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～

藍と私たちの町



実は、私たちが普段見慣れている町並みや吉野川、さらには阿波踊りも「藍」と深い関係があるみたいです！

「阿波の北方」といわれる吉野川流域の平野部では、昔から藍づくりが行われており、江戸時代・明治時代には、一大産業でした。これは、徳島の気候と土地が藍づくりに適していたからで、吉野川の影響が大きくありました。今でもこの地域では、藍づくりが続いています。町を探索すると、「藍」で栄えた跡があちこちに広がっています。それは、「藍屋敷」と呼ばれる立派な建物や、豊かさの象徴である「うだつ」の上がった町並みなどです。そして、徳島を代表する伝統芸能「阿波踊り」なども「藍」の繁栄がかかわっているのです。

「藍」でにぎわう徳島の様子



あいおいち
藍大市の様子（再現）

江戸時代の中頃、徳島城下で開かれた「藍大市」の様子です。幟や人の多さから、にぎわっていたことが分かります。

徳島では、いつから「藍」がつくられていたの？

史料が残っていないため、確実なことは分かりませんが、室町時代には徳島は「藍」の一大産地だったと考えられています。

室町時代中頃の文安2年（1445）に、徳島から大量の「藍」が兵庫の港に運ばれたことが「兵庫北関入船納帳」という古い文書から分かっています。この時、徳島以外の地域から藍が運ばれた記録はなく、ここから、「藍」はすでに徳島の特産品となっていたといわれています。

これらも全て「藍」に関係しています

「藍」の歴史が、今の私たちの町につながっているんですね。



あいやしき
藍屋敷
（奥村家住宅）



あわおど
阿波踊り



うだつの町並み



よしのがわ
吉野川

藍って何？



藍の葉



徳島では「蓼藍」という種類の藍を栽培しています。青色の成分が含まれている、葉の部分を使用します。

藍の葉を発酵させてできるのが「藍」という染料です。



藍の葉を発酵させてできるのが「藍」という染料です。「藍師」と呼ばれる職人が約100日間かけてつくります。

藍染め



藍を使用して、「藍師」と呼ばれる職人が藍染めの液を作ります。この液に、生地をつけると青色に染まります。



緑の葉が、きれいな青になるなんて、不思議ですね。

「藍」とは、青い色の名前でもあります。青色のものになる植物やそれからつくる染料のことです。世界に色んな種類の「藍」があります。私たちは昔からそれらを使って様々なものを青色に染めてきました。江戸時代には、庶民の服や暖簾など町のあちこちに青があふれていたのです。

藍の葉から、左のような工程で藍染めができるようになります。

ところで「藍」って何でしょう？
青い色の名前だと思っていただけれど…

世界中で親しまれている「藍」



藍染めは世界中で古くから行われていました。例えばエジプトでは、藍染めの布が巻かれた約4000年前のミイラが発見されています。また、北アメリカでは、藍染めた衣服を作業着として使っていました。それが現在も多くの人に愛される「ジーンズ」の起源だといわれています。

48種類もある！「藍」の色の名前

藍からできる色はバリエーションが豊富で、その数はなんと48種類といわれています。薄い青色から、濃い青色まで、様々な表情を持っているのです。それぞれの色の名前の由来を考えてみるのも面白いかもしれません。

藍白	藍白	秘色	空色	水浅葱	錆浅葱
浅葱	湊鼠	藍鼠	紺鼠	錆鼠	水色
新橋色	縹	青藍	深縹	薄藍	花浅葱
花色	藤納戸	納戸	高麗納戸	錆鉄御納戸	錆御納戸
鉄	熨斗目花色	藍	濃藍	藍錆	紺
紺藍	藍鉄	搗色	青搗	紫紺	茄子紺
				搗返し	留紺

次のページからは、江戸時代や明治時代の徳島の藍づくりを、漫画で見ていきましょう！

物語の元は、「藍田灌水之図」などの史料です。江戸時代、藍畑で作業をする若者が、苦勞の末に立派な藍師・藍商人になったお話がえがかれています。

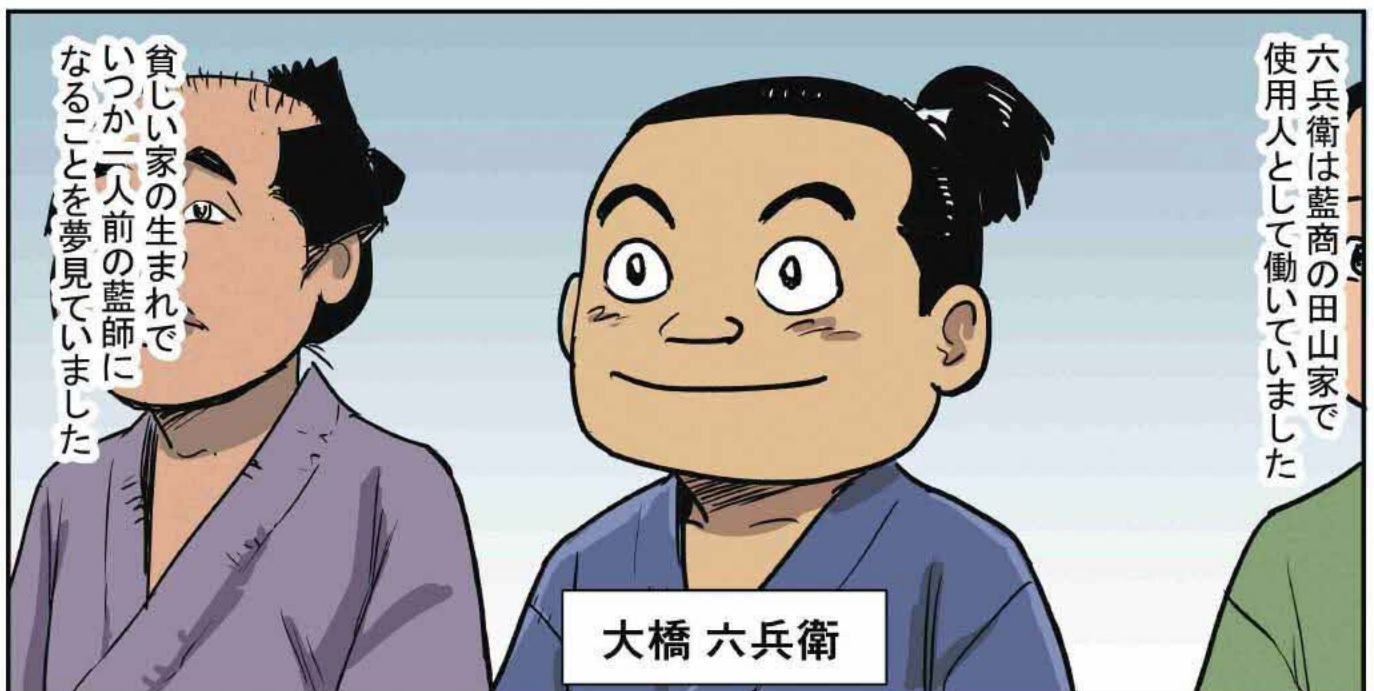
漫画でわかる！

—阿波と藍の物語—

次のページからスタートです！

1805年 4月

六兵衛の奉公するお屋敷

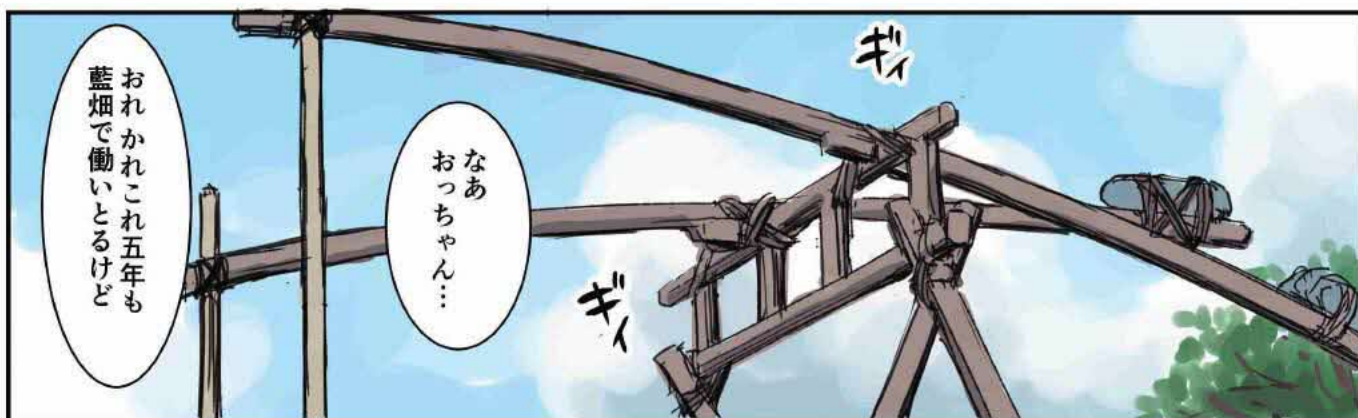




※1 伏流水…川の水が、川の下にしみこんで地下を流れる水のこと。

吉野川の下流域では
※1 伏流水が流れており
藍畑に井戸を掘って『撥ね釣瓶』で
※2 は、汲み上げて使っていました

※2 撥ね釣瓶…井戸から水を汲み上げる仕組み。片方におもりをつけてシーソーのようにして汲み上げます。



おれかれこれ五年も
藍畑で働いとるけど

なあ
おっちゃん…



ふー

あぢいなん



いつになったら
藍師になれるんだろ？

五年？…
わしゃ三十年も
これをやとるわ





当時藍の流通には主に
吉野川が使われていました

吉野川は
普段は穏やかな川ですが
毎年、嵐が来ようものなら
『暴れ川』へと変容し
村や田畑を襲ったのです



大変じゃあ！
はんらん
氾濫しそうじゃ
みんなを避難させな
あかん

ううっ

バババ



あ い ば た け

藍畑での作業



たま

むしはらいぼうし
虫払箒

あいばたけ
藍畑での大変な作業の一つが害虫駆除。当時は上のような農具を使って葉についた虫を払い落としていました。人力での駆除はとても根気のいる作業だったでしょう。

4~5月頃：苗植え



あえ
苗が20cm程に成長したら畑に移植します。

6月頃：一面緑の藍畑



あい
藍づくりは、3月上旬の種まきから始まります。その後、肥料をまいたり、除草、害虫駆除と大変な作業が続くのです。梅雨明け頃になると最初の刈り取り、7月から9月上旬にかけて2回目・3回目の刈り取りを行います。

あいばたけ
藍畑では、手間と時間をかけて丁寧に藍草が育てられているのですね。



藍屋敷の洪水対策



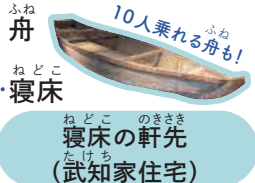
対策① 高い石垣の上に建てられた屋敷

あいやしき
洪水時に水につからないよう、高い石垣の上に建てられた藍屋敷があちこちにあります。石井町の田中家住宅では最も高い所で2m70cmの石垣があります。吉野川の中洲にあり、たびたび洪水被害を受けた美馬市舞中島にも、高く石垣を築いた住宅や寺が見られます。

あいやしき
藍屋敷（田中家住宅）まいなかしま
舞中島地区

対策② いざという時の備え！脱出用の舟

あいやしき
藍屋敷内には「寝床」と呼ばれる藍染料の加工場があり、ここでは藍師が藍づくりをしていました。「寝床」の軒先には、洪水時に脱出するための舟がつるされています。

ふね
寝床
寝床の軒先
(武知家住宅)

あい
吉野川は「四国三郎」と呼ばれる「日本三大暴れ川」の一つで、たびたび氾濫を起こしました。その際、洪水によって栄養豊富な土がもたらされたため、川の流域は藍の栽培にぴったりの土地です。当時、藍師・藍商人は、「藍屋敷」と呼ばれる立派な建物に暮らし、仕事をしていました。屋敷には、この地域で生活するための様々な洪水対策が見られます。

あい
当時の人は、洪水に負けないように、屋敷に色んな工夫をして暮らしていたんですね。

※日本三大暴れ川
とねがわ
関東の利根川、九州の
ちくごがわ
筑後川、四国の吉野川の
よしのがわ
こと。それぞれ「坂東太
ろう
郎」、「筑紫次郎」、「四国
さぶろう
三郎」と呼ばれています。

藍粉^{こな}成し作業

収穫した藍草を刻み
葉と茎に分けます



葉藍を叩きほぐしながら
乾かします



藍すり



乾いた葉藍は
ずきんに入れ一時保管します



九月になると
いよいよ『すくも』作りで
もっとも大事な『寝せ込み』
の工程に入ります



“寝床^{ねどこ}”と呼ばれる
広い土間に
保管しておいた葉藍を
積み上げていきます



徳島藩の支援もあり、阿波の藍は全国から認められる上質な「本藍」に成長しました。



ねどこ すくも 寢床での染づくり



だんだん完成に近づいてきました!



「ふとん」をかける



寒くなる10月下旬頃からは、葉藍に「ふとん」と呼ばれる藁をかけて保温しながら、発酵させます。

12月上旬以降：「染」の完成



寝せ込みから約100日後、発酵を経て、染が完成します。

はあい しゅうかく 葉藍の収穫

あい こな 藍粉成し



くきと葉に選別し、葉を約2日間乾燥させます。

9~12月頃：寝せ込み



水をかける様子



寝どこ 葉藍に水をかけ、そして混ぜ合わせる作業(切り返し)をくり返すことで、葉藍を発酵させます。

阿波の北方では、江戸時代から変わることのない染づくりを今も見ることができます。「藍師」が手がける染づくりは、美しい藍の色を出すための、大事な工程です。

葉を収穫したら、いよいよ寢床での「染」づくり！
完成するまで色んな工程があるみたいです。



あ わ あい 阿波藍を守る職人



そめし 染師



藍師がつくった染を使い、染師は様々な物をきれいな青に染めます。「灰汁発酵建て」という染液づくりでは、化学薬品は一切使わず、灰汁・ふすまなどの天然材料で染液を作ります。染師の青く染まった手から、藍染めへの思いが読み取れます。

あいし 藍師



藍師は、発酵熱で60~70度まで熱くなる葉藍の切り返しを、素足に半ズボンで行います。普通の人ならたえられない熱さですが、「藍師は肌で感じて仕事をしろ」という先祖からの教えを大切にしているのです。

藍づくりに全身全霊で取り組む職人によって、阿波藍は伝えられていきます。

伝統を受け継ぐ職人が、
今も藍をつくり続けています。

◆ 徳島藩の支援を受けて、日本全国ですくもを販売していました。



※手板法：数滴の水で少量の『すくも』を練ったものを使い、和紙（手板紙）にハンコのように押して、出来を判定しました。



※賞牌板：現代のトロフィーにあたるもの。藍の品質の上位から、「瑞一」「准一」「天上」の等級がつけられました。

六兵衛が「瑞一」を受賞すると
仲買人たちが六兵衛のすくもを
買い付けに来るようになりました

パン
パン

存分にお楽しみ
ください

取引が成立すると
仲買人たちを「お接待」して
豪華な料理や踊りで
宴席を盛り上げました

トントン

トントン

藍商人の活躍が
阿波踊りや
阿波人形浄瑠璃
といった今に続く
徳島の伝統芸能と
深く関わりました

去年の藍は
出来がいいと
褒めていただいた
今年もこれから
忙しくなるぞ

若い頃から働きながら学び
苦難を乗り越えてきた六兵衛は
四十歳にして大きな藍屋敷を
構える藍商人になりました

しっかり
頑張るように



藍商人の裕福な暮らし



あやしき おくむら
藍屋敷の中(奥村家住宅)



まるでお城のよう!ここで商人をもてなしたんですね。

豊かさの象徴「うだつ」が上がる町

やしき 屋敷の2階の端に設けられた「うだつ」は、もともと火事の延焼を防ぐ防火壁でした。次第に豪華な装飾がなされ、豊かさの象徴となりました。



うだつの
町並み

徳島藩の支援や藍商人の活躍のおかげで、全国で高い評価を受けた阿波の藍。藍栽培から販売まで手がけた藍商人は、立派な藍屋敷を建て、藍の買い付けにきた全国各地の商人を最大限にもてなしました。そんな藍商人たちが築いた屋敷が立ち並ぶのが「うだつの町並み」です。豊かさを競うかのように豪華な装飾がなされており、当時の裕福な暮らしがうかがわれます。

阿波の藍を質・量ともに日本一に成長させた「藍商人」の暮らしが気になります。



藍商人が育てた芸事

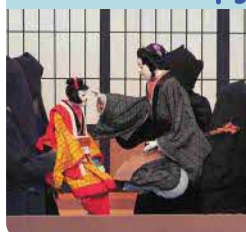


阿波踊り



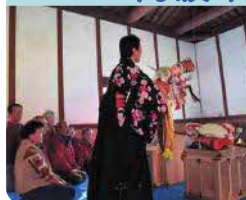
今の阿波踊りには各地の様々な要素が取り入れられています。上方(現在の大阪)や九州、関東、三重などの文化の影響を受けており、全国で活躍した藍商人の姿を感じることができます。

阿波人形浄瑠璃



義太夫節の浄瑠璃と三味線、三人遣い(一体の人形を三人で操る)の人形の三者で演じる人形芝居。大きく光沢のある人形を使い、「阿波の手」といわれる大きな振りで演じられます。

阿波木偶「三番叟まわし」



2つの木箱に4体の木偶を入れて、人形遣いと鼓打ちの二人が組になって行う芸能です。正月行事として親しまれ、藍商の屋敷にも訪れて、寝床で藍の神様に奉納します。

江戸時代のお座敷では、よく盆踊りの唄がうたわれていました。全国で活躍していた藍商人は、これに各地の民謡などの音楽をミックスさせました。こうして出来上がったのが今の「阿波踊り」です。

また、芸事を好んだ藍商人は、たびたび人形座を招いて人形芝居を楽しみました。このことから「阿波人形浄瑠璃」や阿波木偶「三番叟まわし」のような木偶文化も発展したのです。

「お接待」を盛り上げるためにも、芸事はとても大事なんですね。「藍商人」が育てた芸事には何があるのでしょうか?

そして現代

大橋コーポレーション本社

OOHASHI
corporation

そうして
初代大橋六兵衛は
藍商人として名を馳せ
うだつを上げたわけです

幕末には二代目に
事業は受け継がれ
勢いに乗って
運輸業と酒造業を営む
※多角経営に乗り出しました

※多角経営：複数の業種を営むこと。

大橋家 十代目

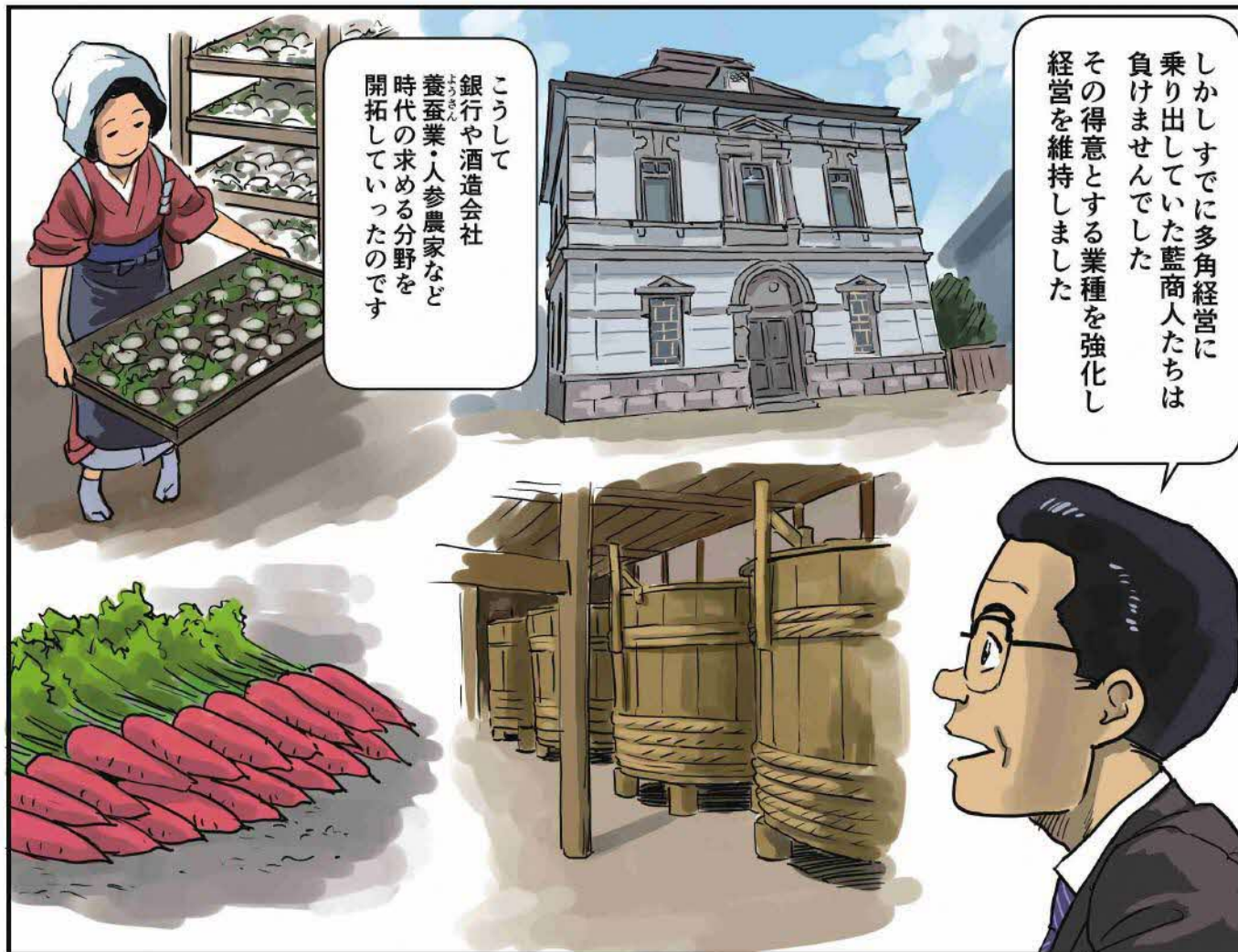
その後明治時代になると
海外から洋装が伝わり
技術革新によって
工場で木綿が生産される
ようになりました

また
安くて染色の手間のかからない
インド藍や人工藍が大量に
輸入されるようになり
阿波の藍は大打撃を受けたのです



しかしすでに多角経営に
乗り出していた藍商人たちは
負けませんでした
その得意とする業種を強化し
経営を維持しました

こうして
銀行や酒造会社
養蚕業・人参農家など
時代の求める分野を
開拓していったのです



初代が藍商となつてから二百年
私たちの先輩が築いてきたものは
今もじつかりと
この徳島に息づいています

時代を先取りし
開拓していく『藍商魂』は
今も私たちの中に
受け継がれているのです





私たちの町の日本遺産ストーリーをまとめました！

藍のふるさと 阿波

〜日本中を染め上げた至高の青を訪ねて〜

徳島県

徳島市・吉野川市・阿波市・美馬市・
石井町・北島町・藍住町・板野町・
上板町

古くから日本人の生活に深くかわり、日本を代表する色彩である「藍」。明治時代に日本を訪れた外国人は日本中に「藍」で染められた衣服が溢れていることに驚き、「この国は神秘的なブルーに満ちた国」と絶賛しました。その神秘的なブルーを生みだしていたのが「阿波の北方」といわれる徳島県北部の吉野川流域です。この地域は日本一の藍染料「染」の産地で、今も職人が伝統の技で染づくりを行い、日本の染織文化を支え続けている藍のふるさとです。

藍の里の景観と風土

徳島県北部を東西に流れる吉野川の流域では、高い石垣でかさ上げされた大きな屋敷があちこちに見られます。

お城を思わせるこの屋敷は「藍屋敷」と呼ばれこの地域を象徴します。「藍屋敷」は「藍師」や「藍商人」の住居・仕事・商談の場であり、ここから多くの染が全国に送り出



▶奥村家住宅



▶吉野川



▶「寝床」の軒先に
つられた舟

されました。暴れ川であった吉野川の流域では、たびたび洪水が起こり、人々に大きな被害を与えました。しかし、洪水によって養分が豊富な土がもたらされるこの地域は、藍の栽培に適した土地だったのです。

室町時代には、藍がこの地域の特産だったといわれ、江戸時代に入ると、徳島藩が藍の生産を支援し、積極的に品質向上に努めました。品質が高まった阿波の染は「本藍」と呼ばれ全国で人気となりました。

阿波の藍師や藍商人たちは、染を買いに来る全国各地の商人たちを最大限にもてなし、信用を得るために競って豪華な屋敷を構え、接待に多くの金を使いました。立派な「藍屋敷」が多くあるのは、こうした歴史が理由です。「藍屋敷」には染の加工場である「寝床」が今も残り、洪水の時の脱出

藍染料、「薬」づくりの技

用の舟がつり下げられています。これが、薬づくりの技術を受け継いできた藍のふるさとの風景です。



▶ 藍畑



▶ 藍の葉に水をかける藍師



▶ 藍の葉を切り返す藍師

阿波の北方では、江戸時代から変わることのない伝統的な薬づくりを今も見ることが出来ます。初春、種をまき、梅雨明け頃には一面緑の藍畑が広がります。初夏に収穫した藍の葉を細かく刻み、乾燥させ、発酵させることで薬が出来上がります。「寝床」では、積み上げられた藍の葉に水を打ち、混ぜる作業が秋から冬にかけて何度もくり返されます。そこには、全力で美しい色を出す薬をつくる職人の姿があります。

藍の葉の発酵温度はやがて60度を超え、作業中の寝床の中はもうもうと湯気がたちこめ、暖かい空気と刺激的な臭いでいっぱいになります。その温度と臭いは薬の仕上がりを知る目安です。そして12月上旬以降、黒い土の塊のような姿になり、薬が出来上がります。

阿波藍の流通と繁栄



▶ 阿波踊り



▶ 阿波人形浄瑠璃



▶ うだつの町並み

全国で評価された阿波の薬。阿波の藍商人もまた全国規模で活躍しました。藍商人たちは富を得るだけでなく、各地の文化を阿波に持ち帰りました。そこから阿波独自の文化に発展し、今の阿波踊りとなります。

また、芸事を好み、金銭を惜しまなかった阿波の藍商人がたびたび人形芝居を楽しんだことから「阿波人形浄瑠璃」などの木偶文化が繁栄しました。今でも年明けには「三番叟まわし」が藍屋敷を訪ねて芸を行っています。

脇町には、藍豪商が築いた「うだつの町並み」が残ります。本来防火のために作られた「うだつ」は、豊かさを競うかのように豪華な装飾がなされています。美しいうだつの上がつた町並みや、敷地内に船着き場までつくられた豪商の屋敷を見ると、藍で栄えた当時の暮らしがうかがえます。そして、年の暮れには藍景氣を唄う「三味線餅つき」の軽快なリズムが当時のにぎわいを伝えています。

日本遺産マップです！



- ①⑦ 林家文書 もんじょ
- ①⑧ 手束家文書 てづか もんじょ
- ①⑨ 北島町所蔵 藍関連文書 しよぞう あい
- ②⑩ 高橋家文書 たかはし もんじょ
- ②⑪ 阿波藍製造 あ わ あいせいぞう
- ②⑫ 阿波藍栽培加工用具一式 あ わ あいさいばい
- ②⑬ 阿波踊り あ わ おど
- ②⑭ 阿波人形浄瑠璃 あ わ じょうるり

- ②⑮ 阿波木偶「三番叟まわし」 あ わ で こ さんぱそう
- ②⑯ 舞中島地区 まいなかしま
- ②⑰ 藍の生産地と集散地を結ぶ景観 あい しゅうさんち
- ②⑱ 美馬市脇町南町伝統的建造物群保存地区 み ま わきまちみなみまち ほぞん
- ②⑲ 吉田家住宅 しやみせんもち
- ③⑩ 三味線餅つき あ く はっこうだてあいぞめ
- ③⑪ 灰汁発酵建藍染（全域） あ わ あい ちゅうせん
- ③⑫ 阿波藍の注染



これが「藍のふるさと 阿波」

構成文化財一覧

① 田中家住宅

② 武知家住宅

③ 奥村家住宅

④ 割石家住宅

⑤ 藤田家住宅

⑥ 山川町諏訪の藍屋敷

⑦ 工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群

⑧ 絹本着色農耕図「藍田灌水之図」

⑨ 「藍農工作之風景略図」

⑩ 見性寺文書

⑪ 勝瑞城館跡及び守護町勝瑞遺跡

⑫ 徳島城跡及び徳島城下町跡

⑬ 藍染庵と犬伏久助像

⑭ 奥村家文書

⑮ 元木家文書「加登屋日記」

⑯ 武知家文書

吉田家住宅



犬伏久助像

阿波市

美馬市

吉野川市



発行：藍のふるさと阿波魅力発信協議会

お問い合わせ先：藍住町教育委員会社会教育課 ☎088-637-3128

本冊子は、令和2年度文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）により作成したものです。